

新刊書の紹介

シリーズ《家畜の科学》 「1. ウシの科学」 広岡博之 編集

「2. ブタの科学」 鈴木啓一 編集

「4. ニワトリの科学」 古瀬充宏 編集

大学から家畜改良センターに異動して変化した一つに家畜を見る目がある。今は家畜を絶えずウシ、ブタ、ニワトリなどとして、さらに乳用牛、肉用牛などに細分類して考えるようになった。ヒトの家畜に対する期待は畜種によって異なり、かつ具体的であることから、実際の畜産を考えれば当たり前のことである。このような中で、ウシ、ブタ、ニワトリの科学と題したシリーズ《家畜の科学》を読む機会を得たこともあり、畜産に詳しい編者の方々の識見に改めて感心した次第である。優れた本を出版した編者および著者の努力に敬意を表したい。これからさらに続いてヤギ、ヒツジおよびウマの科学が出版されるようであるが、今後の出版にも期待したい。

ウシ、ブタ、ニワトリ、それぞれについて編者の編集姿勢が「まえがき」に述べられている。「食料・生命・環境をキーワードに新しい最先端の研究も積極的に盛り込みながら、ウシとウシによる生産システムに対する科学的な探求を試みた」（広岡）、「養豚の生産現場に詳しい実践的な研究者を中心に配置し編集されたブタに関する専門書」（鈴木）「ニワトリに関する基礎的な知見、応用的な視点あるいは問題解決に向けたヒントや糸口が幅広く網羅されている」（古瀬）と書かれている。ウシ、ブタ、ニワトリとも13~14項目に分類されて記述されているが、最初の1~3の項目のタイトルはほぼ共通しており、それぞれの「起源と品種」「世界と日本の生産システム」「特徴」が述べられ、畜産学的背景が各畜種紹介の導入部分となっている。これらに続いて栄養、飼料が述べられ、さらに順番は異なっているもののウシとブタでは繁殖、遺伝、育種、環境（糞尿）、トピックスなどが、そしてニワトリでは管理、疾病、免疫、トピックスなどが述べられている。またウシで「乳生産」「肉生産」、ブタで「豚肉の流通、枝肉規格、肉質」、ニワトリで「ニワトリの発生と遺伝子工学」「卵の特徴」「肉の特徴」が独自の項目として取り上げられ、それぞれについて特筆すべき内容がまとめられている。

鈴木啓一博士が「まえがき」に書かれているように、わが国の畜産従事者（農家）は、この30年、激動の中を歩んできた。「養豚の飼養戸数は1/20に減少、一戸あたりの頭数は17倍に増加。肉用牛と乳用牛も戸数はそれぞれ1/6、1/4に減少。一戸あたりの飼養頭数は6倍、3.5倍に増加。採卵鶏は飼養戸数は1/50に減少し、1戸あたり飼養羽数は58倍に増加。」と書かれている。このような乳、肉及び卵の生産の変化は種畜の遺伝的改良と飼育環境改善等による生産効率の大幅改善を背景として成り立っている。このような変化を支える科学技術がこの本に書かれているが、これをどのような想いで読むかは読者によって異なるだろう。

このような変化は畜産の形態にも現れている。農業の一部として営まれていた時代から経済性を重視する畜産企業が活躍する時代へと畜産の担い手の中心が変化している。こうした中で畜産から離脱して涙を流した農家も多い。一方、成功した優良企業もある。《家畜の科学》の背景にはこのような農家や企業家の思いもあることを実感させられる。

最近、一次産業としての畜産の優位性を強化し、社会になくってはならない産業として成立させる努力について考えることがある。飼料用稲やエコフィード、糞尿の資源化などの取り組み強化についてである。「養豚農業振興法」に表された理念につながる点が多い。本書には、このような視点で記述されたと窺われる項目もあり、私と共通する編集者・著者の視点に親しみを持った。

本書が研究者・技術者・行政担当者のみならず広く畜産関係者に読まれることを期待する。さらに大学などにおいても新畜産学時代の教科書として使われ、畜産学教育の充実が図られることを期待する。

(独立行政法人家畜改良センター理事長 佐藤英明)

発行 2013年11月（ウシの科学）、2014年3月（ブタの科学）、2014年7月（ニワトリの科学）

価格 4200円+税（ウシの科学）、4000円+税（ブタの科学・ニワトリの科学）

発行所 （株）朝倉書店

〒162-8707 東京都新宿区新小川町6-29

TEL:03-3260-0141 FAX:03-3260-0180